

特集にあたって

吉瀬 章子 (筑波大学)

近年、昭和を懐かしむ映画や本が人気を集めています。確かに大阪万国博覧会などに郷愁を感じるものの、私自身は「妻が家族を置いて海外出張するなど以ての外」であった昭和ではなく、平成に家庭をもち、仕事を続けられていることに感謝しています。

2005年の夏も（決して友好的な雰囲気とは言えないものの）夫と娘に後を頼んでIFORSに参加しました。そこで編集委員である成蹊大学の池上敦子さんにお目にかかったことが、本特集の発端です。帰国後池上さんより、下記のような錚々たる先輩方による本誌特集のコピーを送って頂きました（敬称略、所属は当時）。

特集「女性 OR 研究家」

オペレーションズ・リサーチ vol. 28, pp. 580-619 (1983)

「特集にあたって」松田寿子 (日本 IBM)

「マルチ人間の『OR 感覚』」井垣伸子 (名古屋商科大学)

「家庭経営と OR」小澤紀美子 (東京学芸大学)

「オペレーションズ・リサーチと私」杉山明子 (NHK 放送世論調査所)

「大学行政と OR」瀬尾芙巳子 (京都大学)

「最近 10 年間の MDS 開発と利用に参画して」浅野美代子 (日本開発銀行)

「ネットワーク評価手法へのグラフ理論の適用」高梨敬子 (計量計画研究所)

「四色問題よもやま話」竹中淑子 (慶応大学)

「AIC による技術格差の分類とその実証的分析」牧野京子 (中央大学)

20 数年経った今、同じように女性を中心とした特集が組めないかとのご相談でした。

この特集の 2 年後には男女雇用機会均等法が成立、1997 年の法改正を経て、女性を取り巻く環境は大きく変化しています。上記の「特集にあたって」によれば、

当時「OR 学会の女性会員は学生会員も含めて全体で約 50 名ほど」で、「女性正会員全員に原稿をお願いした」とのことですが、2006 年 5 月時点で女性の正会員は 104 名、学生会員は 29 名に上っています。

今の時代にふさわしい特集を考えめぐっていたところ、私の専門である最適化分野に限定しても非常に多くの女性研究者が活発に研究を続けていることに思い至りました。大風呂敷を広げる前に、まず専門に近い方々にお願いをしてみよう。そこから読者の皆様に 20 余年の変化を感じ取って頂けるかも知れない。そのような思いから標題「21 世紀を最適化する女性たち」を掲げ、最適化ならびに関連する分野で活躍されている中堅、若手の女性研究者の方々に原稿をお願いすることにしました。日頃家事、育児と超人的なスケジュールをこなされている方々ばかりなので、このような企画にご賛同頂けるか甚だ不安だったのですが、そのような心配は無用とばかり、お願いしたすべての皆様からご快諾を頂くことができました。改めてご執筆頂いた皆様に心から感謝を申し上げます。皆様のご協力により、女性研究者の横顔とこの分野におけるタイムリーな話題をご紹介します特集となりました。

前回の特集において松田寿子先生は「今後さらに OR の女性研究者が増えてくることを期待したい。やがては女性の特集が特集ではなくなることを願うものである」と結ばれています。諸先輩方は本特集をどのようにご覧になるでしょうか。また、もし 20 年後にこのような企画が打ち出されたとき、女性研究者はどのように感じ、どのような特集を組むのでしょうか。私が OR 学会員となったのは、前回の特集の 2 年後でした。先輩方のご期待を裏切ることのないよう今後も精進したいと思います。

最後にこのような機会を与えてくださった本誌編集委員会の皆様、原稿の遅滞、差し替え等で大変お手数をおかけした嶋原さんをはじめとする事務局の皆様に変更してお礼を申し上げ、結びとさせていただきます。